

聖書：第二サムエル記3章12～21節

説教：あなたと契約を結ぼう

1 ダビデと將軍アブネル

1) アブネルの提案

イスラエルの初代の王であったサウルが戦いで倒れたことを聞いたダビデは、亡命先から祖国に戻りました。ユダ族はダビデを快く迎え、ダビデを王とします。しかし、いっぽうでサウルの息子であるイシュ・ボシェテをイスラエルの王とすべきであるとする人々もいました。この二つのグループの間で戦いが起きてしまいます。イシュ・ボシェテを後ろから支えていたのはアブネル將軍です。彼はサウルの家のために一生懸命働きます。ところが、イシュ・ボシェテ王はアブネルを正しく評価せず、かえって、「おまえはイスラエルの王座を狙っているのだろう」と疑ってしまいます。アブネルはこの言葉を聞いたとき、イシュ・ボシェテではなくダビデこそイスラエルの王となることを確信し、ダビデのために働く決心をします。

今日はその続きです。アブネルは早速ダビデのところに使いを送り、こんなメッセージを届けます。「この国はだれのものでしょうか。私と契約を結んでください。そうすれば、私は全イスラエルをあなたに移すのに協力します。」

2) まずミカルを返しなさい

イスラエルの中で兄弟どうし争いを続けるべきではないと考えていたのはダビデも同じでした。でも、ダビデにうまい解決策がある訳ではありません。そんなあるとき、ア

ブネルのほうから和平提案が来ました。渡りに船とはこのことです。ダビデはアブネルからの申し出に対し、「よろしい。あなたと契約を結ぼう」と答えます。

しかし冷静に考えると、この話はあまりにもうますぎます。罠という可能性も十分に考えられます。本気なのか、それとも罠か。このままでは判断できません。

そこでダビデは、ひとつの条件を出してアブネルを試すことにします。かつて自分の妻であったミカルを返してくれたなら、アブネルに会おう、そういう条件です。なぜこんな条件を出したか。二つの理由があります。

一つ目の理由。ダビデがサウルのもとでまだ働いていたときのことです。サウルの娘であるミカルは、ダビデを見て結婚したいと思っていました。父のサウルはダビデに結婚の条件を告げます。「ミカルと結婚したいと思うのなら、敵であるペリシテ人百人を倒してこい。」ダビデは、倍の二百人のペリシテ人を倒します。そうやってミカルを妻としました。ところが、サウルはその後ダビデを憎むようになったとき、ふたりを無理矢理別れさせ、ミカルをパルティエルに与えてしまいます。ダビデがこのことでどれだけ苦しんだのか、想像していただきたいと思います。その時以来、なんとかミカルを取り戻したい。ダビデはずっと願っていたので、このようなことを条件としました。それが一つ目の理由です。

3) 人質に取る

二つ目の理由は、かなり政治的な事情です。いつも言いますが、ダビデの時代は日本の戦国時代とよく似ています。国と国とが争っているようなとき、できることならお互いに戦争という手段はとりたくありません。そこでどうするか。隣の国の大将の娘と結婚関係を結びます。自分の娘が相手の国にかいるのですから、下手なことはできません。ひとこと言えば人質です。ダビデが考えていたのもこれです。

もしミカルを連れてくるなら、アブネルが本気であるとわかります。同時に、サウルの娘を人質に取ったことにもなります。サウルの家は下手に戦争をしかけてこれなくなります。

ダビデのやっていることをどう思うでしょうか。自分の妻を政治の道具に使うなんて不純な動機ではないか。納得できないと言ってしまうでしょうか。でも、戦争を止めることができるなら、そのほうがずっと良いはずです。聖書は結果のでない理想主義を語るものではありません。一步でも正義に近づくために、現実的な解決を目指していきます。ダビデがミカルを要求した二つ目の理由です。

2 アブネルの働き

1) ミカルを取り戻す

それでもなお納得できないことがもう一つあります。ミカルと結婚していたパルティエルのことです。ミカルがダビデのところに向かうとき、彼はとぼとぼとミカルの後を泣きながらついて行きます。アブネルから「もう帰らなさい」と言われて、やっとあきらめ家に戻る。哀れなのはこのパルティエルだと思いませんか。親が勝手に決めた結婚だった

かもしれませんが、夫はミカルを愛していたのです。こんなに悲しんでいるのに、ダビデはそれでも無理矢理に引き離すのか。このことをどう考えてよいのか。

人間的な言い方をするなら、神にとって、ダビデにとってもパルティエルのことは都合の悪いことです。こんなことは書かないほうが良い。でも、聖書は事実を誤魔化すことなく記します。妻と引き裂かれて悲しみに暮れるパルティエルというひとりの男に神は目を留めていきます。なぜか。そのことはまた最後のところで触れたいと思います。

2) 和平交渉を進めていく

アブネルはミカルをダビデのところに戻し、自分が本気であることを示します。そして、イスラエル中を駆け回り、ダビデをイスラエルの王とするように、指導者たちと交渉を重ね、説得していきます。そのなかでも最もむずかしい交渉相手は、ベニヤミンの人たちでした。というのは、初代の王であったサウルはベニヤミン出身なのです。サウルの息子であるイシュ・ボシエテが正当な世継ぎであると強く推しています。ダビデを王とすることなど簡単には承服できません。とは言っても、アブネルはベニヤミン族から一目置かれた実力者でもあります。アブネルのことは無視する訳にはいきません。説得に説得を重ね、なんとか、ダビデをイスラエルの王とすることに同意する一歩手前まで進めることに成功しました。

ダビデはアブネルから交渉の進み具合について報告を受けます。アブネルが、神のみこころを成し遂げるために惜しみなく働いている様子を知り、盛大な祝宴を開きその労に報います。かつて敵どうしであったのに、

信頼できる信仰の友を得ることができたと喜びます。

3 契約を結ぶ神

1) 忠実に成し遂げる

イスラエルが和解をし、一つとなる、そのことが目の前に見えてきました。ここまで来れたのは、アブネルが契約を申し出てきたことがきっかけです。「私と契約を結んでください。そうすれば、私は全イスラエルをあなたに移すのに協力をします。」

契約とは何か。そのことを考えます。ダビデとアブネルがしていることを見ると二つのことがわかります。

その一つ目。契約は、約束したことを必ず実行しますという前提で契約を交わされるものです。もし実行する気もないのに契約を結ぶなら、それは詐欺と呼ばれ、犯罪となります。アブネルはダビデと契約した以上、ダビデのために働き、協力を惜しみません。約束したことを忠実に果たさなければと考えました。

神も同じです。神は、私たちと救いの契約を結んでくださいます。一度結んだ契約は絶対に破棄されることはありません。どんなに大きな問題があろうとも、一度交わした約束は絶対に果たさなければならないと考えます。では大きな問題とはなにか。罪の問題です。神に背く者はさばかれなければならない。この原則は絶対に変えられません。一方、神は私たちを愛し、何とか罪の中から救わなければと心を痛めます。両方を満足できる解決などあるのか。ひとつだけありました。神ご自身が罪を負われ、罪人なられ、さばかれ、神ご自身がいのちを捨てる。そこまでして、救いの契約を忠実に守ろうとします。それが

契約の一つ目の意味です。

2) 回復させる

契約の意味の二つ目。契約の実行にあたり、ダビデが真っ先にアブネルに要求したことは、自分の妻であったミカルを返すということでした。親の一方的な都合によって、無理矢理に別れさせられたのかもしれないが、すでにほかの男の妻になっています。普通なら言うでしょう。あきらめてください。そうではないのです。問題が起きてからどんなに時間が経過していても、正しい状態に戻さなければならない。神の救いとはそういうことです。一年前であろうが、十年前であろうが、百年経とうが、もう死んでしまったから遅いとか、そんなことは関係ない。正しいもとの状態に回復させるために、神はあらゆる手を尽くす。これが、神が救いの契約を交わしてくださったことの二つ目の意味です。

では、あのパルティエルはどうなるのでしょうか。ダビデとミカルはよかったかもしれませんが、パルティエルには何もよいことがない。むしろ、悲しみの人生に突き落とされたように見えます。神はどうするのですか。神は、このパルティエルのことも顧みられます。だから聖書に記すのです。今は悲しむしかありません。でも、ダビデがアブネルと交わした契約は、ただふたりだけの間の契約ではない。すべての悲しむ者が、回復し、喜ぶ者とならなければならない。神は、そのことを成し遂げるのだという約束です。ならば、パルティエルのことも後に回復されていくはず。神がパルティエルのことも覚えていて、聖書に名を記して私たちに教えているのです。

今日の前に、悲しみを抱えていらっしやる

方がいるかもしれません。神の救いのことを聞いても、何も救いがない、何も回復されていかない、パルティエルのように泣きながら家に帰るしかない、そう思っている方もいるでしょう。

神はダビデだけの神ではありません。私たちの神です。ダビデに約束したことは、私たちにも同じように果たされます。ミカルと別れさせられ、他人の妻となってしまったとき、ダビデはどうしたか。泣いたでしょう。悔しかったでしょう。ミカルを助けてやれないことを残念に思ったでしょう。

でも時が来ると、神は必ずもとの正しい状態に戻します。神の目に遅すぎると言うことはありません。最もよいときに、もとの正しい状態に戻していただきます。